戦屋 -IKUSAYA-

kaz

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
戦屋　－ＩＫＵＳＡＹＡ－

【Ｎコード】
Ｎ１６９１Ｄ

【作者名】
ｋａｚ

【あらすじ】
小川を社長とした日本で唯一の戦屋。まだ２つ名も持たない戦屋の仲間たちは戦乱の世へに起こる争いに影から干渉する。・・・・・・はたして、このやる気なし社長と愉快な仲間たちは見事仕事ができるのか！？

一戦目　～日本唯一の戦屋～（前書き）

これは「能力者伝説」とは関係ありません。しかし主要キャラの名前は同じなので、「能力者伝説」のキャライメージで読んでくれたらいいと思います。

一戦目　～日本唯一の戦屋～

戦乱の時代。
世界は荒れに荒れ、内戦、紛争、さらには国どうしの大戦。
ただし、あちこちの国は独自の戦力、兵器を持っていた。

そんな時代なのだから裏世界も荒れきっている。
そして、最近あらわれたのが戦屋。

裏で戦や紛争などの一切を操ることを仕事とする。無論、表沙汰にはされない。

――日本にある中では唯一の戦屋。

普通に見るとただの一戸建て。平凡な3階建ての家である。

そこの一階のリビング。

小川　「・・・・・暇～。暇だよ～。なんかないの～？暇～、ひーーー」

小川の右頬がめり込む、そのまま吹っ飛んだ。

井ノ原　「あぁもう！！うっさいわよ！黙りなさい！」

大宮　「もう黙ってるよ。三途の川を目の前にしながらね。」

ここの戦屋の従業員は小川、井ノ原、大宮を含めて6人。
そして、全員が未成年である。

ちなみに、社長は小川だ。

小川　「いたた・・・・でも暇なものは暇じゃん！」

井ノ原　「それは仕事がやりたくてしょうがないってこと？」

小川　「ん～・・・・・単純に暇だぐらいしか言うことないじゃん。」

そのとき、ベルがなった。

井ノ原　「ん？お客さんかな？」

井ノ原は玄関へ向かっていった。

小川　「・・・・いや、客じゃないよ。」

大宮　「ん？またあれか？勘ってやつ。」

小川　「そう。」

そして、人が入って来た。

川原　「遅れた。」

小川　「ほら、客じゃない。」

川原　「客？後ろにいるぞ。」

小川　「・・・・。」

大宮　「あてになるんだかならないんだか・・・・・。」

―2階。応接室。

応接室にはこれといった飾りつけはない。あるのは本や書類。筆記用具ぐらいである。
部屋の中央には机があり、それをはさむ形でソファーがおいてある。

客（戦屋の言葉では「オーダー」というが、これはあまり使われていない）は中年男性だった。
体系は並、紳士を来ている。背丈は１７０ｃｍぐらいである。

客　「え～、私、タールと申します。長崎の長をやっています。」
小川　「あぁ、あのドカンした県ね。あと広島もドカンしたよね。」

井ノ原　「あ、少々お待ち下さい。小川く～ん・・・・ちょっとおいで。」

小川　「！！！！」

小川は井ノ原に連れられ（引きづられ）応接室しかでていった。

―１０分後。

小川　「んで、要件をどうぞ。」

小川は体中傷だらけである。

タール　「はい。実は佐賀、大分の両軍に宣戦布告通知をだされまして。」

小川　「それで？」

タール　「両者とも旧時代の武器ですが、何分、数に差がありまして。私たちが少なくとも大分には勝てるようにしたいのです。」

小川　「はい。了解です。ではまず、この書類にサインを。」

小川は紙束をわたした。これは失敗しても責任はおわず、その依頼主の国から戦闘・工作時のさい、資金援助を約束するものである。タールはサインをし、井ノ原に連れられ応接室をでた。

大宮　「あいつの話では長崎は2万。問題の大分が3万。佐賀が2万。まぁ、圧倒的に不利なんだが。」

小川　「なんで大分には勝ちたいのかな？」

川原　「おそらく、佐賀を挟み撃ちにしたいんだろ。全くバカだな。」

大宮　「まぁ、依頼主がそうしたいならそうするさ。俺たちは深くは干渉したくないんで。」

小川　「んじゃ、作戦会議だ～。」

4人は3階へ向かった。

一戦目　～日本唯一の戦屋～（後書き）

「能力者伝説」と同じオリジナルキャラによる別の話を作ってみました。
同時に二つの物語つくるだなんてバカだなぁと思ってる方もどうか楽しく読んでいただけたら幸いです。

二戦目　～動きだす戦屋～

小川たちは3階に集まった。

小川　「ところでさ、あと2人は？」

川原　「向池は家の仕事があるから遅れると言っていたが、白縫維は知らん。」

小川　「白縫維が来ないかぁ～。」

大宮　「・・・・・し～ら～ぬ～い～。ギョーザあるぞ～。」

白縫維　「まじでぇっ！」

白縫維は床からでてきた。

井ノ原　「またあんたは・・・・・・。今度は床？前は・・・・え～っと・・・・。」

川原　「前回は天井から登場。その前は壁が仕掛け扉になっていたらしくそっからでてきたな。」

白縫維　「いやぁ。毎回楽しいよ。んで、ギョーザは？」

大宮　「あとでな。さて、向池は来るからいいとして、始めようか。」

向池　「よくありません。」

向池は扉をゆっくりとしめて入って来た。

向池　「途中からでは皆さんに迷惑をかけますので。間に合ってよかったです。」

小川　「じゃあ、始めよ～。まず、大分との戦いだね。つか、なんで大分？」

大宮　「それより、なぜ岡山がこれに干渉していないのかが謎だ。」

川原　「そんなことは知らんよ。どうせ関わってくるさ。」

小川　「でぇ、大分。どうするの？」

大宮　「取りあえず、今の武器の差を比べよう。長崎が大砲や新型の連射銃をあわせて５０持っている。あいては刀や弓などだが、佐賀が大砲を５つ持ってたはずだ。」

大宮はパソコンをタカタカたたきながら喋る。

井ノ原　「そんな情報どこに載ってんのよ。」

大宮　「今聞いた。」

一同　「聞いたぁ！！？」

大宮　「あぁ、佐賀の軍隊取締役に友人がいてさ。」

小川　「よく教えてくれたね。」

大宮　「いや、スパイだしね。」

井ノ原　「は？スパイ？」

大宮　「詳しくは友達とも言うね。旧友だよ。」

小川　「大分は誰かわかる？」

大宮　「いまケータイでメールしたからじきにパソコンにかえって・・・・来たよ。」

大宮はパソコンを華麗に操る。というか、タイピングの速さが尋常じゃなかった。

井ノ原　「友達が多いわね。」

大宮　「まぁね。」

大宮　「えっとね・・・・・・あれ？フランス製の大型機関銃を5つ持ってるって。こりゃ怖い。」

小川　「あぁ、もしかして最近つくられたあれ？『デストロイ』・・・・だっけ？」

川原　「それはアメリカの新型の戦車だと聞いたぞ？」

大宮　「まぁ・・・・実は戦車じゃないって噂もあるけどね。」

井ノ原　「どうにせよ・・・・大分の機関銃は問題ね。」

大宮　「戦闘開始まであと４日だけど・・・・・いけるかな？」

小川　「じゃあ、川原にたのんだ～。」

川原　「機関銃に細工・・・・・か？」

小川　「別になんでもいいよ～。」

川原　「ふん・・・・了解だ。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1691d/

戦屋 -IKUSAYA-

2010年10月9日05時05分発行